特別養護老人ホームにおける寮父母の介護意識について

三原　博光*　横山　正博**　峯本佳世子***

要約

本論文の目的は、アンケート調査を通して、特別養護老人ホームの寮父母の介護意識を明らかにすることである。調査対象として、4つの特別養護老人ホームの寮父母150名が選ばれた。その結果、多くの寮父母は介護職への動機づけも高く、また職場の労働環境にも満足し、転職もあまり考えていなかった。また、施設の介護経験から、彼らは高齢者介護が施設よりも在宅の方が望ましいと考えていた。しかし、彼らは介護職に対する社会の評価の低さを感じていた。

本調査結果から、寮父母の介護意識は高く、特に大きな問題を抱えているようにみられなかった。ただ、彼らは介護職の評価が社会的に認められていないと感じており、今後、介護職が社会的に評価を受けるような取り組みが社会福祉関係者の間で行われるべきであろう。

キーワード：特別養護老人ホーム、寮父母、介護意識、調査、施設介護、在宅介護

はじめに

現在、わが国は高齢社会を迎え、様々な高齢者福祉施策や福祉サービスが実施されるようになってきた。また、2000年に実施が予定されている公的介護保険の導入により、社会全体に介護に関する関心や期待が益々、高まってきている。そのような状況のなかで、筆者達は特別養護老人ホームの寮父母に対して介護意識の調査を実施した。特別養護老人ホームは、在宅で生活の困難な高齢者が入所し、しかも多くの高齢者が人生の終末期を迎える社会福祉施設である。そのような施設で、日々、高齢者の介護に従事する寮父母の介護意識を明確にすることで、寮父母に対して自分達の介護の再認識を促し、方向性を示すことができるのではないかと考えた。また、施設管理者も、寮父母達の介護意識を知ることによって、彼らに対して、好ましい職場環境を提供できるのではないかと考えた。このような目的で、調査を実施し、調査結果が得られたので、ここで、それを報告することにした。

過去、特別養護老人ホームの寮父母に対する調査は、寮父母の介護負担や看護など他職種との連携について調べたものは報告されている[1)~5)]。しかし、寮父母の介護意識を調べる調査は、ほとんど実施されていない。それは、介護意識については、各寮父母の個人的価値観が強く影響を及ぼすので、介護負担などの方が調査の実施が容易であったためではないかと思われる。

1．方　法

調査対象者：4つの特別養護老人ホームに勤務する寮父母150名を調査対象者とした。

調査方法：4つの特別養護老人ホームに調査用紙を配布し、記入を依頼、後に、回収した。

調査期間：1997年2月から8月までであった。

質問項目：(1)基本属性（年齢、性別）、(2)介護職を希望する動機、(3)介護に対するイメージ、(4)介護のあり方、(5)他職種との比較、(6)介護に対する社会の評価、(7)海外の介護の情報について、全体で約20程の質問項目から構成されていた。

2．結果と考察

(1)　基本属性

特別養護老人ホームA施設53名（29.4%）、B施設44名（29.3%）、C施設48名（32.0%）であった。これらの特別養護老人ホームの所在地は、A施設は山口県、B施設岡山県、C施設兵庫県であった。性別は、女性が91.3%（137名）、男性が8.0%（12名）であった。平均年齢は、35.9歳、最小年齢は20歳、最高年齢は60歳であった。年齢構成の割合は、20～29歳50.0%（73名）、30～39歳8.1%（12名）、40～49歳19.5%（29名）、50～60歳22.9%（34名）であった。

*　山口県立大学看護学部
**　山口県立大学社会福祉学部
***　大阪薫英女子短期大学

20～29歳が約半数を占め、その他については、40歳代以上の割合が多くなっている。

以上の結果から、約91％が寮母であった。そして、年齢については、約半数は20歳代であったが、40歳以上の寮父母の割合も多かった。この傾向は、ある程度、子どもの重要な養育期間を終えた主婦が、介護職に従事しているためではないかと思われる。

(2)　介護職を希望する動機

①介護の仕事を選んだ動機（図１、参照）

「福祉や介護に関心があった」の回答が32.7％と

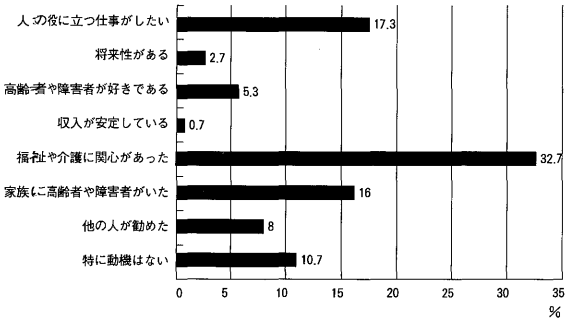

図１　介護の仕事を選んだ理由

最も多く、次いで「人の役に立つ仕事がしたいと思った」17.3％、「家族に高齢者や障害児がいたから」16.0％であった。これらの結果から、多くの寮父母にとって、福祉や介護についての個人的関心や家庭環境が介護職の希望になっていることが分かる。

(3)　介護の仕事について

①仕事のやりがいは、何であるか（複数回答）。

仕事のやりがいについて、「自分の精神的成長」が60.7％が最も多く、次いで「入所者および家族からの感謝、信頼」54.0％、「入所者の状況の変化」40.0％であった。この結果から、寮父母は自分自身の内面だけでなく、入所者のなかにも仕事の意義を見出そうとしていることが分かる。

②職場の設備に満足しているか（図２、参照）。

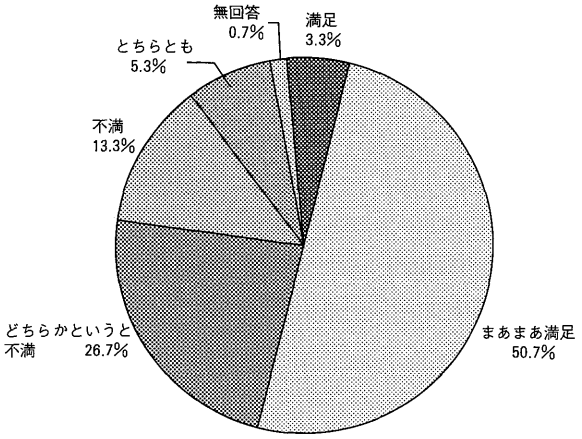

図２　職場の設備に満足しているか

図の結果を「満足している」と「不満足である」に分類をし、まとめると「満足している」が54％、「不満足である」が40％であり、ほぼ回答が二分された。その結果、職場の設備に関して、明確な傾向が示されなかった。

③職場の人間関係や雰囲気に満足しているか（図３、参照）。

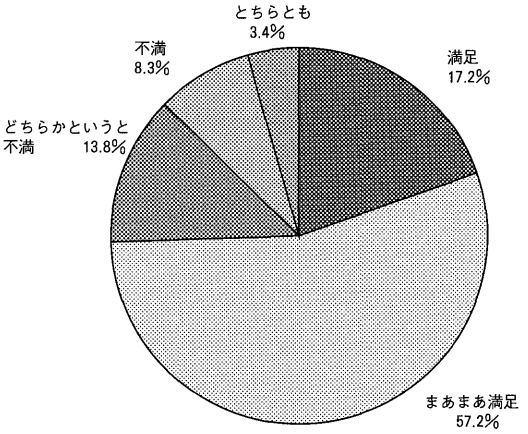

図３　職場の人間関係や雰囲気に満足しているか

図の結果を「満足している」と「不満足である」に分類をまとめると、「満足している」77.4％、「不満足である」21.3％であった。大部分の寮父母は、職場の人間関係に満足しているようである。

④転職を考えたことがあるか。

「ときどき考える」31.3％、「あまり考えない」32.0％、「全く考えていない」24.0％であり、約56％は転職を考えていなかった。前問で寮父母の多くが、職場の人間関係に満足していることも転職をあまり考えていないとする回答結果に影響を及ぼしていると考えられる。

⑤　転職の理由（転職を考えたと回答したもののみ）

「腰痛など体調をこわす」15.3％、「勤務時間の不規則」8.0％、「施設の運営方針があわない」4.0％であった。主な転職の理由は、健康上の問題によるものが多く、介護業務が大変であることが分かる。

(4)　介護のあり方に関する質問

①高齢者の介護は、施設よりも家庭でもっと行うべきであると思うか。

「強く思う」が24.7％、「まあまあ思う」43.3％、「あまり思わない」25.3％であった。約68％の寮父母は、高齢者の介護は在宅が望ましいと考え、施設での生活が高齢者にとって、必ずしも好ましいはと考えていないようである。

②高齢者の終末期を迎える場所は、どこが適当であ

ると思うか

68.7%が「在宅」、6.7%「病院」、2.0%「施設」であった。大部分の寮父母は高齢者の終末期を迎える場所として在宅が適当と考え、施設であるとは思っていない。特に調査対象となった寮父母のわずか2%が「施設」であると答えている。これは、寮父母が施設は高齢者の終末の場所にとって、不適切な場所であると実感していることを示しているといえよう。

③ターミナルケアについて、もっと学習したいと思うか（図4,参照）。

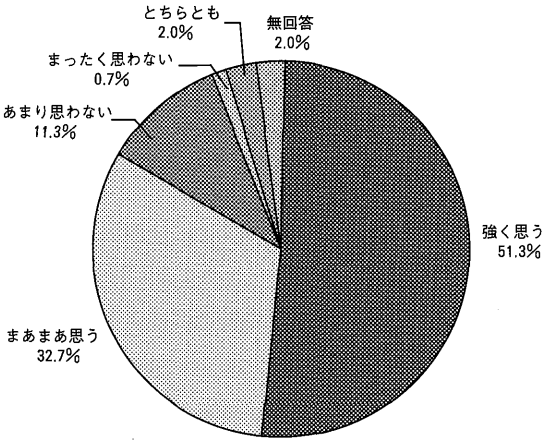

図4　ターミナルケアについてもっと学習したいと思いますか

「強く思う」51.3%、「まあまあ思う」32.7%であり、約85%の寮父母がターミナルケアの学習の必要性を感じている。これは、高齢者の終末期を介護する寮父母の実体験に基づくものであろう。

④どのような面に配慮して介護を実施しようと思うか。

「健康」37.3%と最も多く、次いで「他の入所者との人間関係の調整」19.3%、「余暇活動」10.7%、「地域社会とのつながり」5.3%であった。「健康」の割合が最も高かったのは、寮父母が要介護者は常に健康状態との関連のなかで把握するという介護の基本原則を認識していることを示しているといえよう。

⑤あなたが老後を迎えたとき、介護者から特に何を期待するか（図5,参照）。

「話し相手」32.7%、「身の回りの世話」30.0%、「医療的ケア」8.0%であった。

寮父母は日々の介護業務のなかで、高齢者とのコミュニケーションの大切さを感じていた。これは、寮父母が施設業務のなかで、高齢者とのコミュニケーションの重要性を実体験として感じているのか、あ

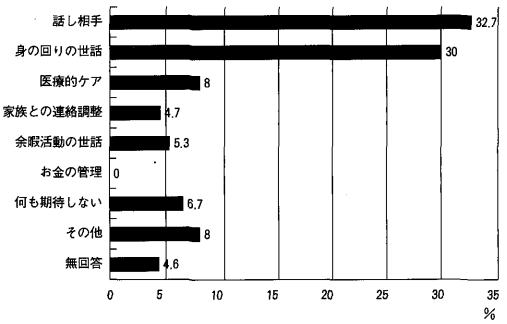

図5　老後を迎えたとき介護者に何を期待するか

るいは現在の施設で、高齢者と寮父母とのコミュニケーションの不足を感じているのかどちらかであろう。

(5)　他職種との比較

①介護の仕事は、医師に従属する仕事だと思うか

「思う」33.6%、「思わない」60.0%であり、「思わない」と回答したものが多かった。これは、多くの寮父母が、介護業務のなかで、直接、医師の指示を受けた機会が少ない結果によるものと思われる。

②介護の仕事は、看護婦に従属する仕事だと思うか（図6、参照）。

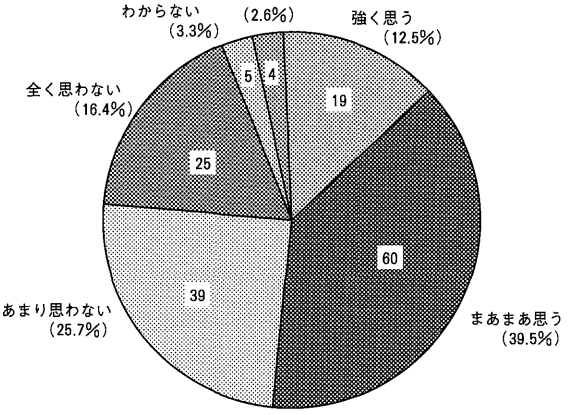

図6　看護婦に従属すると思うか

ここでも、図の結果を「思う」と「思わない」に分類すると、「思う」52.0%、「思わない」42.1%となり、「思う」と回答したものが多かった。これは、寮父母が施設現場のなかで看護婦から医療的ケアの指示を受けながら、介護業務に従事していることも影響を受けているであろう。

③介護の仕事が、他の専門職（看護婦や作業療法士、理学療法士）などの仕事に比べて、社会的に高いかどうか。

「あまり思わない」と回答したものが44.7%と最も多く、次いで「全く思わない」が43.3%であり、全体の約88%は介護職が他の専門職と比べて高いと思っ

ていない。つまり、寮父母は介護職の専門性が他の専門職と同じように評価されていないと感じているようである。

(6) 介護に対する社会の評価

①社会の人々が、介護の仕事にもっと理解して高い評価を与えるべきか。

「強く思う」が47.3%、「まあまあ思う」30.7%であった。約78%の寮父母が、介護の仕事に対する社会的認知が不十分であると感じており、この回答結果も介護職が他の専門職（看護婦、作業療法士、理学療法士など）よりも低いと回答したものと関連していると思われる。

②地域の人々は、老人ホームを好意的にみていると思うか。

「あまり思わない」39.3%、「まあまあ思う」40.0%と回答が二つに分かれた。つまり、ある寮父母は特別養護老人ホームに対する偏見を感じており、別の寮父母は高齢者福祉に関する社会の関心の高まりによって、老人ホームに対するイメージが変わってきたと感じているのであろう。

(7) 海外の介護の情報について

①日本の高齢者福祉は、外国（特に欧米諸国）の高齢者福祉の影響を受けていると思うか。

「思わない」48.0%、「思う」35.3%で、それ程、大きな差がみられなかった。つまり、この点に関して、寮父母の介護意識の傾向が明確に示されなかった。わが国の高齢者福祉施策の多くは、欧米諸国の高齢者福祉施策の影響を強く受けているのであるが、一部の寮父母にとって、欧米の高齢者福祉事情よりも目の前の介護業務が重要であると感じているようである。

②日本の高齢者福祉を進歩させるためには、もっと外国（特に欧米諸国）の高齢者福祉の情報が紹介されるべきだと思うか。

「強く思う」41.3%（62名）、「まあまあ思う」30.7%（46名）であり、約72%の寮父母は、日本の高齢者福祉の進歩には諸外国の情報が必要であると認識している。つまり、一部の寮父母は、欧米の高齢者福祉事情よりも目の前の介護業務が重要であると感じながらも、多くの寮父母はわが国の高齢者福祉の進歩に外国（特に欧米諸国）の高齢者福祉の情報の必要性を感じているのである。

3．全体的考察

まず、調査対象者の大部分は寮母であった。わが国の場合、高齢者の介護に従事する者は女性であるとする伝統的な風潮と施設寮父母の専門家を養成する介護福祉士養成校に女性のみの入学を限定している専門学校や短期大学が存在していることがその要因となっているのであろう。

介護職の希望の動機については、約5割が「福祉や介護に関心があった」、「人の役に立つ仕事がしたいと思った」という目的意識をもって就職していた。恐らく、寮父母として就職する以前の介護福祉士などの専門家を養成する社会福祉の学校に入学した時点から、このような気持ちをもっていたと思われる。

次に寮父母の多くが転職をあまり考えていなかった。これには、寮父母が現在の職場環境に満足していること、あるいは経済的不況による転職の難しさなどの要因が影響を及ぼしていると思われる。それでも約3割の寮父母が転職を考えた経験をもち、しかもその理由の多くが健康上の問題であった。この結果から、施設管理者は寮父母の健康上の問題を配慮した職場環境の整備を考えて行くべきであろう。

介護のあり方については、寮父母の多くが施設の介護に疑問をもち、ターミナルケアの重要性を感じていた。つまり、施設介護が利用者の個性を尊重したものではなく、画一的なものであり、家庭に代わる絶対的なものではないと寮父母は感じていると思われる。ターミナルケアの学習の必要性については、多くの寮父母は学生時代も感じていたであろうが、実際の職場で終末期を迎える高齢者介護の体験を通して、ターミナルケアの重要性を強く感じたのであろう。したがって、今後、施設寮父母を対象とした研修のなかで、死の教育（デスエデュケーション）[6]、あるいは死生学（サナトロジー）[7] 等を積極的に取り入れて行くべきであろう。

また、介護で配慮する面では、主に「健康」、「他の入所者との人間関係の調整」、「余暇活動」、自分が老後を迎えたときは、「話し相手」、「身の回りの世話」の回答がみられた。つまり、寮父母達は、介護のなかで、医療的ケアなどの特殊な専門的な介護よりも、むしろ文化、社会的側面を考慮した介護を重視しているのである。言い換えれば、寮父母は、高齢者介護の目的が主に高齢者の自立などを目指したリハビリテーションなどにあるのではなく、「話し相手」、「余暇活動」などの精神的な安定を目指すものであると感じている

と考えられる。

他職種との比較においては、寮父母は医師よりも看護婦に従属するものであると感じていた。施設の高齢者介護のなかで、褥瘡の治療や浣腸、点滴の処置などにおいて、看護婦の指示を直接的に受ける機会をもつ経験が、寮父母の看護婦に従属するという回答結果に影響を及ぼしているのであろう。横山の調査報告のなかでも[4]、特別養護老人ホームの寮父母が看護婦との連携を希望していることが報告されている。高齢者の介護の場面では、寮父母と看護婦との連携が必要となる機会も増えると思われるので、両者がお互いの業務を理解できるような研修の機会を社会福祉関係者は考えるべきであろう。

次に介護の仕事に対して、寮父母は高い自己評価をしていない。これは、大部分の寮父母が、介護の仕事は他の専門職（看護婦や作業療法士、理学療法士）などの仕事に比べて、社会的に高いと思っていないことや、社会の人々が介護の仕事をもっと理解して高い評価を与えるべきと感じていることからも理解できよう。社会全体が高齢者の介護に関心をもち始めたのは、1990年代に入ってであり、しかも多くの寮父母が所有する介護福祉士の資格は、1987年度に制度化されたばかりの新しい資格であり、その専門性の確立がまだ、十分に行なわれていない。したがって、このような専門性の歴史的背景も寮父母の回答結果に影響を及ぼしていると考えられる。なお、介護福祉士を看護婦（士）や理学療法士と同等な資格をもたせるために、社会福祉関係者の間で介護福祉士の養成期間を2年間から3年間に延長するという論議も行なわれるようになってきており[8]、今後、この問題について、益々、活発に論議が行なわれるべきであろう。

次に約5割の寮父母は日本の高齢者福祉が外国の高齢者福祉の影響を受けていると考えていなかった。わが国の介護福祉士の資格や公的介護保険制度は、ドイツの老人介護士や介護保険制度を模倣したものであり、ケアマネジメントの概念については、イギリスやアメリカの取り組みを参考にしている[9)~12)]。したがって、このような情報が寮父母に伝わっていないのか、あるいは寮父母にとって、毎日の介護業務のなかで、海外の高齢者福祉の情報よりも介護技術や目の前の高齢者への介護について関心をもっているのではないかと思われる。しかし、それでも、約72％の寮父母は日本の高齢者福祉の進歩には、外国の高齢者福祉の情報が必要であると謙虚に考えている面がみられる。そこで、わが国や欧米諸国の高齢者福祉事情を正確に伝える機会が施設の職員研修のなかで行なわれるべきであろう。そして、そのような研修によって、よりよい介護が入所者に対して提供されるのではないかと思われる。

本調査結果から、寮父母の介護意識は高く、特に大きな問題を抱えているようにみられなかった。ただ、彼らは介護職の評価が社会的に認められていないと感じており、今後、介護職が社会的に評価を受けるような取り組みが社会福祉関係者の間で行われるべきことが、高齢者福祉のなかで1つの課題となるであろう。

文　献

1）佐々木隆志、辻義人、三浦寛：特別養護老人ホームにおける寮母の介護負担における日英の国際比較研究、豊かな高齢社会の探究vol.2,ユニベール財団調査研究報告書、51-80、1997.

2）筒井孝子：特別養護老人ホームの介護職員における介護負担感の数量化に関する研究、社会福祉学、34,43-82,1993.

3）大串靖子、大和田猛、一戸とも子：老人施設における看護職員と介護職員の職務の連携と分担-職務意識からの分析-、弘前大学教育学部紀要77、63-55,1997.

4）横山正博：特別養護老人ホームにおける寮母の連携に関する意識、宇部短期大学学術報告,33,79-87,1996.

5）江口信枝：特別養護老人ホームの介護職員の仕事への満足度、日本社会福祉学会第44全国大会研究報告概要集、428-429,1996.

6）小河育恵、斎藤美智子：介護福祉士養成施設における死の教育ー学生の死に対する意識調査を通してー介護福祉教育, 2(1),38-41,1996.

7）斎藤美智子、小河育恵、介護福祉士養成施設における死生教育ー短期大学他課程生との比較ー介護福祉教育,3(1),24-27,1997.

8）栃本一三朗他：養成校の立場から見た介護保険、介護福祉教育、4,10-15,1997.

9）古瀬徹：外国の高齢者介護、高齢化社会と介護福祉、一番ヶ瀬康子、仲村優一、北川隆吉編、ミネルヴァ書房、京都、78-94,1991.

10）本沢巳代子：公的介護保険、ドイツの先例に学ぶ、日本評論社、東京都、1996.

11）クラウス・メックス、アンドレア・シュミット：ドイツ介護保険のすべて、榎木真吉訳、筒井書房、1996.

12）白澤政和：公的介護保険が地域福祉を推進する条件、ジュリスト、1094,26-31,1996.

Title: A research on perceptions about carework held by careworkers in nursing and residential home for the aged.

Author: Hiromitsu Mihara (School of Nursing, Yamaguchi Prefectural University)
Masahiro Yokoyama (Faculty of Social Welfare, Yamaguchi Prefectural University)
Kayoko Minemoto (Osaka Kunei Womens' College)

Abstract:

This study focuses on perceptions about carework by careworkers held in nursing and residential home for the aged. One hunderd-fifty carewrkers in four nursing and residential homes were selected as research samples. The research showed that most careworkers had high motivation to care for the elderly, and that they were satisfied with the labor enviroment in facility in which they worked ,and thus felt no compulsion to change to another field of employment. The result also showed that they felt that it is better for the aged to live in their own home than to stay in a nursing home. Furthermore, these careworkers felt that the soical status of carework ist not high. It is necessary that the social status of carework should be improved through the movement of careworkers and social workers.

Key words: nursing and residential homes for the aged, careworker, perceptions about carework, survey, instutional care, home care

---